

発声指導法研究 XI：オンデマンド授業による 発声指導への理解 (2)

宮 下 茂

(長崎大学教育学部音楽教育 (声楽))

The Vocalizing Guide Method Research XI : Understanding of vocal instruction through on-demand lessons (2)

Shigeru MIYASHITA

1. はじめに

筆者はこれまで教員養成学部において、「小学校音楽科」, 「声楽」, 「歌唱表現法 I・II」など, 小学校教員や中学校音楽科教員を目指す学生への, 歌唱指導や発声指導の方法を学ぶ授業を担当してきた。これらの授業は実技指導を中心として, 対面により歌唱を行うのが通例となっている。新型コロナウイルス感染症の拡大の始まりから3年が経ち, 終息が見通せない中で社会生活の制限が緩和され, 感染症との共存生活が続けられる中, 感染症蔓延の影響から始まったオンライン授業も減少傾向にあるが, 歌唱や合唱活動については未だ感染拡大の要因になりかねず, 感染予防が求められることから, 対面による実技指導を主とした科目にとっては授業実施が困難な状況である。しかし, 教員としての指導の技能を学ぶ者にとっては, 学校で実施している学習内容や授業方法を見直し, 歌唱指導内容や発声指導方法の学びを深める機会が続いていると筆者は考える。

通常の歌唱実技授業では, 自らの考えを基に歌唱する学生もいるが, 多くの学生は楽曲を歌唱することに重点を置き, 発声や表現について自ら考えることが少なく, 学習が受け身となり, それらを指導教員からの指示に頼ることが頻繁である。そのような学生は, 指導教員から指示された言葉をぼんやりと覚え, 教育実習で自分が担当する歌唱授業においても, 児童や生徒の歌唱の状況に関わらず, 実技授業で自分が指示され, 覚えた言葉を繰り返し発言しているだけのように見える。残念ながら, 実技授業で指導教員から指示された言葉の意図を理解せず, 目的が分らないままに指導者の言葉として覚え, 教育実習で発言しているように思われる。

コロナ下におけるオンライン授業では, これら実技授業の中で, 指導者が指示する言葉の意図を理解し, 学生自身が指導者として, 目的を持って発言できるようになることを目標とし, そのための有効な学習時間として活用できるよう, 授業内容を考えている。ただし, オンライン授業とはいえ, 学生が受講しながら発語や歌唱を行う必要がある。すべての学生が発語や歌唱を行える環境で, オンライン授業に参加できるとは限らないため, リアルタイムでの授業とせず, 学生が受講時間と受講環境を自由に選択できるように, オンデマンド授業の教材作成を本論文の研究の目的とした。

2. オンデマンド教材の構成について

オンライン授業では、すべての受講学生が発語や歌唱ができる環境で、授業に参加できるとは限らないため、それぞれの学生が受講時間と受講環境を選ぶことのできる、オンデマンド授業の形態を選択した。オンデマンド授業としては、1コマ90分5回の構成とし、スライドを視聴しながら歌唱学習を行い、同時に理解した内容を回答用紙にまとめることとした。

オンデマンド教材では、オンデマンド授業に対応できていない学生への配慮も必要であることから、Microsoft社のPowerPointスライド・ファイルを使用し、クリックごとにスライド内の文字や図が現れ、学生自身のペースで学習が進められるようにした。また、スライド内の文章を最小限とし、図やキーワード、アニメーションを基にして、学生自身が回答用紙に理解した内容を文章化し、授業内容の理解と知識の定着を図った。そして、大学のインターネット学習システムのメッセージ機能を利用し、提出された回答を基に学生の疑問や質問への追加説明を行い、学生の模範的な回答を学生間で共有できるようにも配慮を加えた。(図1参照)

3. オンライン授業 第2回

3.1 「歌の学習方法について～上手になれる練習とは？」

近い将来教員になる可能性を持つ学生であるが、必ずしも歌唱を専門として学習をしているとは限らず、多少の歌唱練習の経験があったとしても、練習による上達の経験をしているとは限らない。この講義の課題への導入として、歌唱学習の基本となる練習の頻度と方法について考えるきっかけとなる質問から始める。

まず、歌唱が上達するための練習方法として二つの選択肢を挙げ、どちらの方法がより効果的か学生に問いかけ、練習の頻度と方法について考えてもらう。それにより、授業における歌唱学習の工夫に結び付くことを期待する。

練習の方法として、「(a) 毎日、繰り返し、歌う練習をして上手になる方法」、「(b) できる時に、ポイントをおさえた練習をして上手になる方法」の2例を挙げる。(a)の練習方法では、発声練習の後に歌唱練習を行うなど、長い練習時間が必要となる。(b)の練習方法では、発声のポイントや歌唱のポイントなど、注意して練習するための考えが必要となる。推奨する練習方法は(a)であるが、練習時間の確保が難しい時には(b)の練習にならざるを得ない。しかし、(a)でも(b)でも上達できない場合は、毎日繰り返し、練習のポイントを覚えて歌う、(a)(b)双方の練習を行うことがよい。これらの指導がなされる状況について考えるならば、(a)の練習方法は個人レッスンなどで行われることが多く、(b)の練習方法は音楽授業での実施が想定され、(a)(b)双方の練習方法は部活動やサークル活動の練習で行われることが多いと考える。

また、歌唱練習に限らず、音楽分野のすべての練習方法に共通するものと考えているが、歌唱練習ではその他にも、毎日歌うと自然とよく声が出るようになることや、毎日歌わずに練習を休む期間が多くなると、声がよく出なくなることも知る必要がある。すなわち、歌唱の上達のためには、練習の内容とともに、練習頻度への工夫と対応が必要である。(図2参照)

3.2 「歌うこと～歌唱と声楽，芸術について」

音楽は、文字通り音を楽しむものと一般に言われているが、音楽の指導については、その有用性が問われることもある。例として、歌は誰にでも歌えるものであり、歌唱指導の必要性について疑問を持たれることがある。学校で行われる授業では、学びが必要とされている。音楽授業では、生涯にわたる音楽の楽しみを知るだけでなく、芸術としての音楽を学ぶことにもなる。ここでは、誰にでも歌える歌もあるが、芸術としての歌を考えてゆく。

外国語を話す人々を「西洋人」と総称し、日本人と比較して言葉と歌との関連をみる。言葉と芸術的歌唱との歴史的な関係を考えるならば、日本人が日本語を用いて芸術的歌唱を行った結果、生まれたのが日本の伝統的歌唱であり、音楽分野としては「邦楽」に属する歌となった。それに対し、西洋人が外国語を用いて芸術的歌唱を行い、その結果に生まれたのが声楽の歌唱であり、音楽分野としては「クラシック音楽」に属している。このように、芸術的歌唱の誕生を遡れば、異なる言語をきっかけとした、異なる歌唱の誕生に辿り着くこととなる。（図3参照）

3.3 「歌うこと～発声（歌唱法）の心がけ」

歌唱法の指導（指示）の中には、必要性を感じられない指導が見受けられることがある。ここでは、歌唱法での必要と感じられない指導（指示）が出される理由を考えてゆく。

同じ芸術的歌唱でありながら、異なる歌唱が誕生した原因を考えるならば、まず、国の違いが挙げられる。日本と西洋では国として異なり、使われる言葉も異なっている。異なる言葉では、音声としても異なることがあり、発音の違いが生じる。また、独自の音（母音や子音）を発することもあり、大きく発声の違いが生じることもある。

日本における声楽分野では、イタリア語やドイツ語など、日本語とは異なる発音の言葉を歌うことから歌唱の学びが始まり、西洋の言葉による歌唱が広く行われている。そのため、声楽の学習では、西洋の歌唱法（発声法）を学ぶことが目的と理解する必要がある。（図4参照）

3.4 「発声（歌唱）の指導は体操から始まります」

理想的な歌唱を行うためには、歌唱練習を繰り返すだけでなく、体全体を動かして歌唱する必要がある。そのためには、体操が重要な役割をはたすことになる。基本的には、体が働くようになるのであれば、どのような体操であってもよいと考えられるが、時間が限られている音楽授業においては、短時間で効果的な体操を行う必要がある。そのため、体操による「目標」を持つことを勧める。

ここでは、①よけいな力を抜いて、必要な力を入れる準備をする運動 ②バランスを崩して、体を活性化 ③腰の中心（軸）を見つけて、姿勢を正す、以上の3点を紹介し、筆者が小学生と行った体操の映像動画を視聴する。（図5参照）

3.5 「繰り返し確認しましょう～質問★呼吸の違いは何でしょう？」

ここでは、次項で紹介する横隔膜への理解を促すために、第1回授業で学習した呼吸の種類についての復習を行う。（図6参照）

3.6 「呼吸～横隔膜について」

歌唱のための呼吸では「腹式呼吸」で行うべきことを、多くの学生がすでに理解している。腹式呼吸とともに、呼吸に関わる名称として知られているのが「横隔膜」であるが、名称を知っていても、横隔膜について理解をしている学生は少数とみられる。ここでは、イラストとアニメーションを使ってイメージを持つことにより、呼吸と横隔膜の関係と役割についての理解を促していく。

通常の呼吸の際に、息を吸うことで下降し、息を吐くことで上昇する横隔膜であるが、臓器で満たされた腹部内に、横隔膜が動くことのできる空間が必要である。ここでは、その空間を《スペース》と称する。横隔膜が下降した際、下降した分だけ腹部内の臓器が押し出されるイメージを持ち、このイメージを、通常の呼吸での横隔膜の動きとして紹介する。

呼吸の指導の際、《胸を上げない》《胸を広げない》など、《胸を使った呼吸》をしないように指導(指示)することがある。注意されている胸の呼吸について、胸腔内にスペースができるとイメージしてみると、横隔膜が下がるためのスペースが移動すると捉えることができる。これらのイメージを基に、胸を広げて吸ってはいけな理由として紹介する。

同様に、《肩を上げない》などの呼吸の指示も、イメージを捉えて理解することができる。(図7参照)

3.7 「姿勢の違い～姿勢と胸の広がり(呼吸)について (image)」

ここでは前述の横隔膜のイメージを基に、実感することの困難な、姿勢と呼吸との関係について理解を促す。良い姿勢と悪い姿勢の例をイラストで示し、呼吸の際の横隔膜の動きをアニメーションで表現する。いわゆる《猫背》の姿勢では、この姿勢での呼吸の際、胸腔内に空間を広げられる余裕があり、呼吸の際にスペースの移動が生じ、横隔膜が充分な動きを取らなくなるとイメージできる。(図8参照)

注意すべき点は、このスペースの移動を想起させる《猫背》の姿勢が、大人にも子どもにも数多くみられることである。そのきっかけが、楽な姿勢を取るための無意識の行動にあることをイラストで示す。小学生では、教科書やノートの詰め込まれたランドセルなどを背負い通学しているが、その重さを軽減するために《猫背》の姿勢を取る様子が見られる。大学生などでは、長時間にわたる立ち仕事などで、疲労を軽減するために《猫背》の姿勢を取る様子が見られるなど、呼吸に影響を与える姿勢を容易に取ることがあり、こうした無意識に取る姿勢への注意も必要であると理解を促す。(図9参照)

3.8 「呼吸～横隔膜と姿勢について」

横隔膜と姿勢のまとめとして、姿勢と呼吸の関係を知ることの重要性を説く。

大切なのは、良い姿勢が良い呼吸を導き、良い呼吸が良い姿勢を導く関係にあると理解して、その関係をイメージすることにある。そのためには、無意識に立つことがないように注意し、常に姿勢を直す意識を持ち、自ら背筋を伸ばして、自身の体を立たせようとする意識を持つのがよい。また、呼吸の際に胸が動かないように(胸を動かさないように)、呼吸の前段階の姿勢で胸を広々と広げておくのがよい。そして、肩を上げないよう(肩が上がらないように)、予め肩(腕)を落としておくのがよい。

以上の意識を持つことを、この項目では促している。（図10参照）

3.9 「呼吸～横隔膜の使い方について」

ここでは、歌唱における横隔膜の役割りを理解して、横隔膜への意識を高めることを促す。

そのため、声楽的な発声法で横隔膜を重要視する理由となる、その働きを紹介する。

横隔膜は息を吸うことで下降し、息を吐くことで上昇するが、声楽的な発声法では、横隔膜をゆっくりと上昇させることにより、横隔膜の働きを促している。その働きとは、吐く息（呼気）を戻そうとする性質であり、その働きから呼吸と音声との拮抗が生じ、《声が大きくなる》《声を強く出せる》《一息を長く使える》などの効果が期待できる。

ただし、その名称の印象からもイメージできるが、横隔膜は肺と腹部の臓器とを分けるための筋肉の壁といえるが、自らの意思で動かすことのできない筋肉であることも知る必要がある。自らの意思の関わらない動きとして、息を短く吐くと素早く動く（音を短く切ると素早く動く）ことが知られている。

ここで思い出されるのが、音楽授業や部活動などで行われる呼吸の練習方法である。それが、「スッスッスッ」と息を吐きながら、発音に合わせて自分で腹部を動かす練習である。横隔膜の性質では、「スッ」と一度だけ発音すれば、腹部が動くのを自覚できる。その腹部の動作から、自ら腹部を動かさなくても短く息を吐くことで、発音の後に吐かれた息を戻すように、横隔膜が無意識に動くのが分かる。練習すべきは、腹部の動作よりも、発音の方法（発音の切り方）であることへの理解が望まれる。

重要なことは、横隔膜が自ら自由に働けるように、腹部周りを広げ、良い姿勢を保ち、鳩尾に無理な力を入れず、楽に構えることである。そのため、腹部周りに広げる力を入れて停め、腹部内（鳩尾）に無理な力を入れず、空洞の状態をイメージして構えることを紹介する。（図11参照）

3.10 「声楽の歌声について～声楽的に『良い声』『悪い声』とは？」

ここでは、《頭声的発声》と《喉声》について復習し、学習したイメージを更に深めることを目指す。それに加え、間違った発声の恰好のイメージの例として、《うがいの恰好》をイラストで示している。

人は《うがい》をする際、水などが気管に流れ込むのを防ぐため「咽頭蓋」を倒している。その咽頭蓋を倒すためには、舌根を喉奥に引き寄せて、団子状に舌の筋肉を固めている。この状態で発音すると、音声が喉奥で響くこととなり、骨伝導により自分によく聞こえてくる。この状態での歌唱を《そば鳴り》と称することがあるが、ここでは《喉声》として紹介している。音声の高さや強弱によって舌根に入れる力が異なるが、喉に向かって入れる力によって、《うつむき》《アゴ出し》などの姿勢の変化や、体や腰の力が抜けることによる姿勢の悪化が起ることもある。また、この状態で、大きな声や高い声を出そうとして息を強めると、突発的に咽頭蓋が動き、声の裏返りが起ることもある。また、この状態を使った高い音色で発音する声を、《裏声》と称することもある。（図12、13、14参照）

舌根に力を入れた状態の声は、自分によく聞こえており、指導や助言を受けても自ら変

えることが困難なことが多い。その状態にあっても、本人の意識の中で〈頭声〉などの歌声を出そうとすることもある。その意識が極端に強すぎる場合に、いわゆる〈鼻声〉になることがあることも知っておく必要がある。(図15参照)

ここで理想とされる〈頭声的発声〉を整理してゆく。発声の際、咽頭蓋が開いて呼気が流れるようにするには、日頃よりも舌を口から出すつもりの位置で口中に置き、舌を平らにした状態で、口中から外へ向けて発音する必要がある。そのために喉の位置では、内部を外向きに拡げるような力を入れるようにする。ただし、呼気が流れる意識が大切であり、自ら呼気を流そうとしない注意も必要である。〈息を流して、声を出す〉のではなく、〈息は吐かずに、声を流す〉との意識を大切にしたい。この頭声的発声に役立つ力として、体を伸ばす力、胸を広げておく力、首を伸ばしておく力、下半身を伸ばす力などが挙げられる。

以上の意識や注意をスムーズに行うために、正しい姿勢を取り、体と喉全体に伸ばす力を入れ、息が流れるように〈喉を開き〉、息を吐かずに声を流す意識を持ち、手順を整理して発声することを勧める。(図16,17参照)

4. 受講学生の反応について

このオンデマンド授業では、視聴した授業の内容に対応した質問への回答として、受講した学生が自身の考えを文章にまとめ、文書ファイルを提出するようにしている。あわせて、受講した授業への感想や質問、授業にかかわる分野への考えや疑問等を調査した。姿勢や呼吸、横隔膜についての学習は学生にとって興味深い話題であった様子であり、多くの感想が記入されていた。(図17参照)

今回の課題は、児童・生徒に説明するつもりで学習内容をまとめる内容であった。課題に関連して、以下のような感想が述べられていた。

「4つの設問を通して、『姿勢』の大切さを感じました。今までの歌唱前に姿勢を整える体操や深呼吸をしていた理由が、文章にまとめることで整理されました。」「自分が理解したことを、児童・生徒に分かりやすく伝えることは難しいのだと改めて感じました。分かりやすい言葉や例を使って教えることの大切さを意識しました。」「小学生の時、教師から『こんな風に意識して歌いましょう』と言われてきたが、意識のポイントが少し違った。自分が教える時には、過去にやってきた教え方に捉われるのではなく、体の作りを考えた上での歌い方を教えていきたい。」「小学生の頃、腹式呼吸をしなさいということは言われていましたが、できているのかよく分かっていませんでした。教師がわかりやすく説明をして、子どもたちが常に意識できるように仕向けることができるかが大切だと思いました。」

また、練習法として紹介している〈毎日繰り返すこと〉に関連した感想では、「授業の最後にふるさとを歌った時、学習したことを実践しているつもりでも上手に歌えませんでした。やはり、繰り返しの練習が必要であると感じました。授業でも、一回で身に付けさせるのではなく、繰り返しの練習によって出来るようにさせるものであると再確認しました。」

歌唱準備（体操など）に関して、以下のような感想があった。「(教材の動画)体操で子どもたちが笑いながら体操していたところが印象的だった。正しい歌声を求めるだけでな

く、子どもたちが意欲的に取り組むことができるよう、楽しさを感じられる準備や練習を取り入れることも重要であると思った。」。

横隔膜の説明に関して、以下のような感想があった。「学校での授業で『腹式呼吸』はよく聞いてたが、具体的によく分かってなかった。今回、イメージを掴むことができた。歌唱指導の中で『横隔膜』について触れられたことがなかったが、横隔膜の説明でさらに、正しい呼吸や姿勢のイメージがしやすかった。」、「高校も含めて12年間の音楽授業で、横隔膜についての説明を受けたことも、意識したこともありませんでした。少しでも多くの正しい知識を児童に与えられるように、正しく理解して、言葉にしてアウトプットできるようになっておかなければならないと思った。」、「小学校の時、よく先生に『お腹から声を出しなさい』と言われた。その時は理解することが出来なかったが、今回、横隔膜の働き、呼吸の仕方を変えて多くの空気を体に取り込み、お腹から吐き出すことが出来ることを学習した。教える時には、ただ『お腹から声を出しなさい』だけでなく、体の働きから、『正しい姿勢で呼吸しながら歌いましょう』と説明ができるようにしておきたい。」。

他にも学生自身が過去の授業で受けた指導を振り返り、以下のような感想を持っていた。「今まで意識したことがなかった。実際に歌ってみると、声の響きが違うことを実感できた。『口をたてに開ける』『腹から声を出せ』と教師は言いがちだが、理解して指導することでよりよい指導になっていく。将来、正しい指導ができるようにしたい。」、「小学校では、音楽の先生が腹式呼吸を教えていた。音楽に詳しくない先生は、『とにかく大きな声で歌え。一生懸命歌う人は呼吸の時に肩が上がるから後ろから見てもよくわかる』と言っていた。すべての先生が正しい歌唱（呼吸・姿勢・声の出し方など）を理解して教えられるようにする必要があると感じた。」。

学生の提出文の中から、以下の説明文を選び、回答例として授業での共有を行った。

- ① 歌唱授業の中での歌唱準備（体操など）への回答：「私が考える歌唱準備は2つある。1つ目は、表情筋のストレッチだ。『ア』の口と『ウ』の口を交互に動かしたり、『イ』と発声しながら笑顔を作ったりなどだ。よい歌唱をするためには豊かな表情で歌うことが大切だと思う。2つ目は、肩と首をほぐすストレッチだ。肩を外と内にぐるぐる20回ほど回し、首も右と左に回す。首と体をほぐし、リラックスさせることで、声が出しやすくなり、よい歌唱に繋がると思う。」
- ② 歌唱における呼吸についての説明：「人間は、胸、腹、横隔膜を使って呼吸しています。呼吸の方法にはいくつか種類があり、私たちが普段行っているのは肺呼吸です。みなさんよく、『おなかから声を出せ』と言われるませんか？いい歌声で歌うためには、腹式呼吸が必要です。腹式呼吸とは、簡単に言うと肺の下の部分を使って息を吐いたり吸ったりすることです。腹式呼吸についてはあとで詳しく説明しますが、まずは姿勢について説明します。いい歌声で歌うためには、いい姿勢が必要です。背筋が曲がったまま歌っている人はいませんか？正しい姿勢は自分で気をつけないとできません。背筋を伸ばし、肩を落としましょう。そして胸を動かさないように胸を広々させてみてください。これが歌う時の正しい姿勢です。いい呼吸で歌うためには、いい姿勢で歌いましょう。」
- ③ 歌唱における横隔膜についての説明：「みなさん、お腹に手を置いてください。置きましたか？では、息を大きく吸ってください。吐いてください。お腹は膨らみましたか？」

か?へこみましたか?へこんだ人が多いみたいです。ではもう一度お腹に手を置いてください。次は、息を吸ったとき、お腹が膨らむように息を吸ってみてください。できましたか?これが腹式呼吸です。人間は胸と腹と横隔膜を使って呼吸をしていると言いましたね。さっき息を吸ったときにお腹が膨らんだのは、横隔膜が下がったからなのです。正しい呼吸は横隔膜が息を吸えば下がり、吐けば上がります。横隔膜の働きを自由にするためには、いい姿勢を保つことが大切です。」

- ④ 正しい歌声についての説明：「みなさん、歌う時に声が裏声になったり、鼻声になったりしていませんか?正しい発声は、頭声的発声です。というのは、息を流して声を出すのではなく、息を吐かずに声を出します。難しいですよ。ではまず正しくない発声について説明します。例えば、喉から声を出そうとすると、喉で音が響いて外に響く歌声が出せませんよね。これを『喉声』と呼んでいます。他にも鼻から声を発してしまうと『鼻声』になり正しい発声にはなりません。正しい発声は、喉から外向きの力を発するイメージで、舌を平らにして声の通りを作って発声します。言い換えると喉を開くイメージです。この時、体、胸、首、下半身の力を使います。これらの力を出すためにはやはり、正しい姿勢で歌うことが大切です。難しいですが意識しながら歌ってみましょう。」

上記回答をした学生の授業の感想は、以下の通りであった。「今まで歌う時、腹式呼吸や正しい歌声について意識したことがなかったが、授業資料を見ながら実際に歌ってみると、声の響きが違うことを実感できた。『口をたてに開けろ』『腹から声を出せ』と教師は言いがちだが、実際に理論を理解して指導することでよりよい指導になっていくのではないかと思う。今日学んだことを忘れず、将来正しい指導ができるようにしたい。」

5. まとめ

オンライン授業ではオンデマンド教材を作成し、音楽授業における歌唱指導に関わる発声指導の考えについての学びを行った。

第2回の授業では、発声や歌唱指導に関わる知識習得に向けた、学生の積極性が特に感じられた。また、受け身になることの多い大学での歌唱授業とは異なり、学生自身が教師になったつもりになり、授業で学んだ知識を子どもたちに伝える内容とした、課題設定も功を奏した様子であった。

今後も児童や生徒に「歌唱技術」を教えられることを目標とした、オンデマンド教材による発声指導についての授業研究を引き続き行っていく予定である。

図1) 扉絵

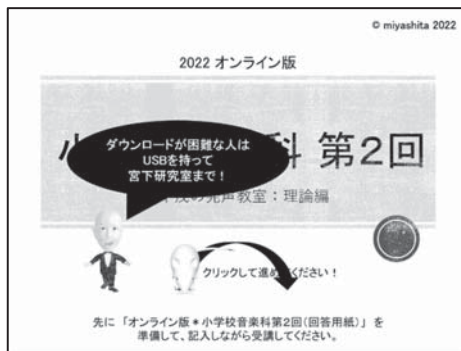


図2) スライド1

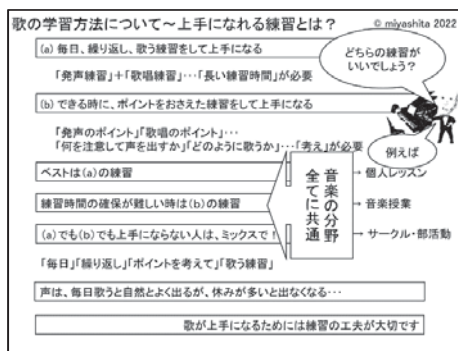


図3) スライド2

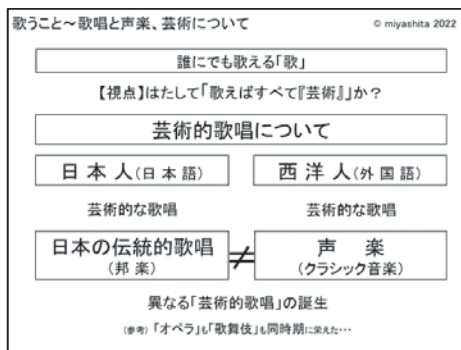


図4) スライド3

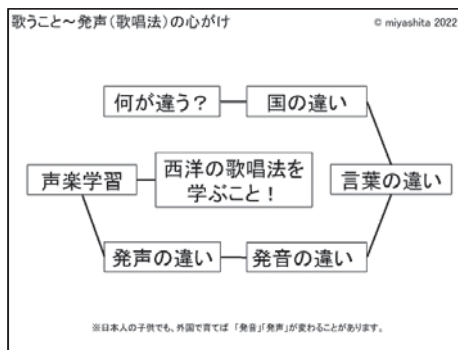


図5) スライド4

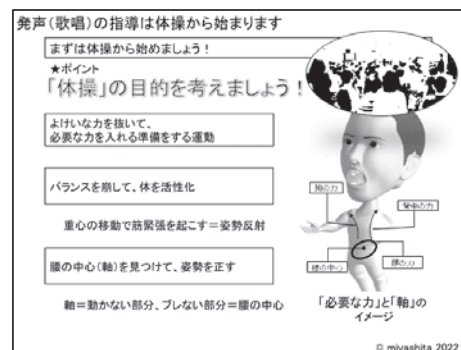


図6) スライド5

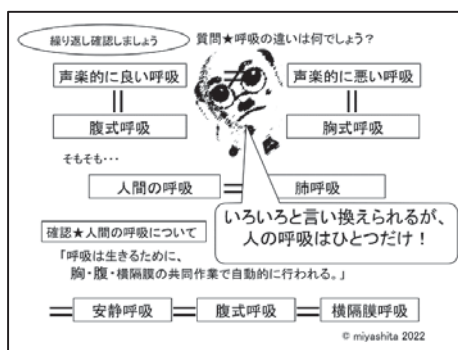


図7) スライド6

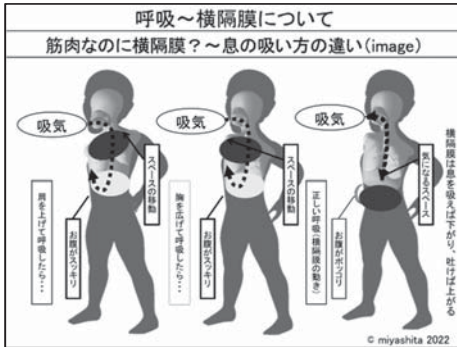


図8) スライド7



図9) スライド8

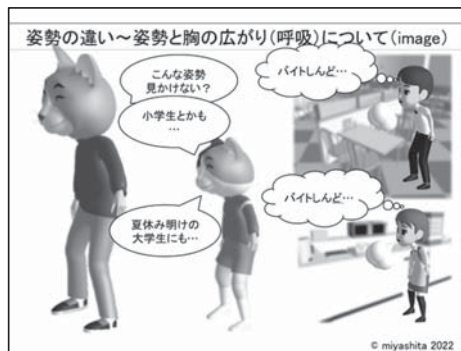


図10) スライド9

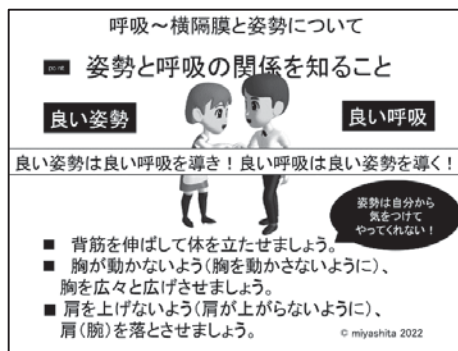


図11) スライド10

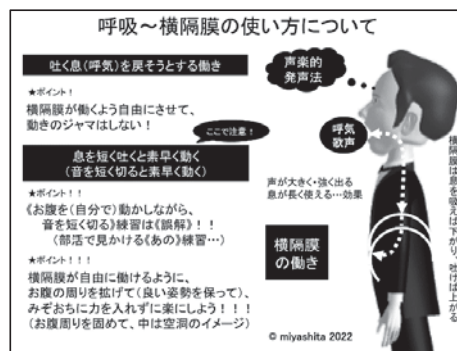


図12) スライド11



図 13) スライド 12

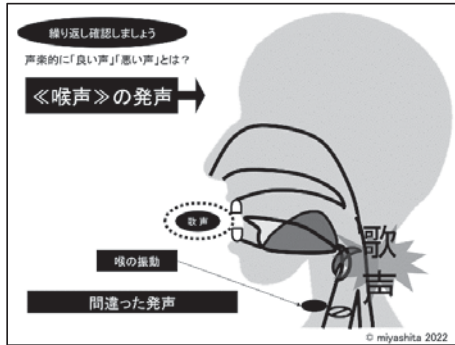


図 14) スライド 13

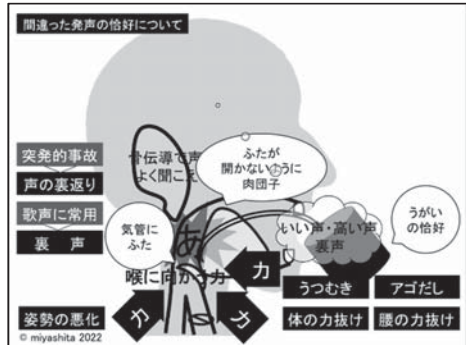


図 15) スライド 14



図 16) スライド 15

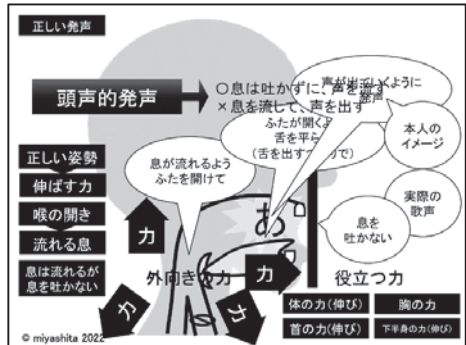


図 17) スライド 16

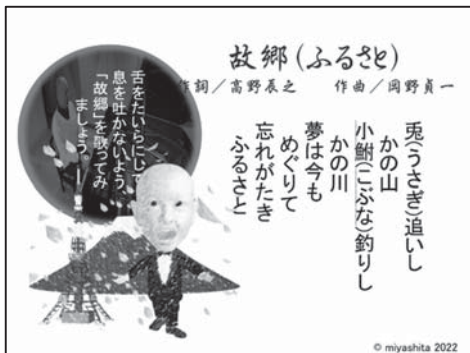


図 18) 扉絵

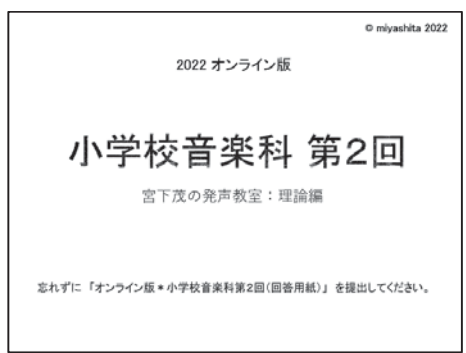


図 19) 回答用紙

学籍番号 _____氏名 _____

小学校音楽科 第2回 高下先生の発声教室 理論編


◎あなたから歌唱授業の中でどんな歌唱準備(体操など)を引きますか？

◎(児童や生徒に教えるつもりで歌唱における呼吸について説明してください)

◎(児童や生徒に教えるつもりで歌唱における横隔膜について説明してください)

◎(児童や生徒に教えるつもりで正しい歌声について説明してください)

◎この授業の感想、疑問、授業にかかわるあなたの考え、疑問等を簡潔に書いてください



以上、記入後にLAGSへ提出してください

参考文献

- [1] 酒井弘, 新版 発声の技巧とその活用法, 音楽之友社, 1974
- [2] フレデリック・フースラー／イヴォンヌ・ロッド＝マーリング／須永義雄／大熊文子, うたうこと 発声器官の肉体的特質－歌声のひみつを解くかぎ－, 音楽之友社, 1987
- [3] コーネリウス・リード／渡部東吾, ベル・カント唱法 その原理と実践, 音楽之友社, 1987
- [4] P. マリオ・マラフィオッティ／魚住幸代, カルソー発声の秘密 合理的なヴォイス・トレーニング, 東亜音楽社／音楽之友社, 1996